

将校の読書嫌い

（大正8年8月）

陸軍中将 佐藤 鋼次郎

編集委員長・過去の偕行記事の中から興味深いものを紹介する。大正期の佐藤中将の『随感随録』である。デモクラシー全盛時代、軍縮が叫ばれる大正

期の将校の読書嫌いを批判している。世界情勢に目を開き、新しい時代に

適應する努力の必要性は、現在の自衛官にも通用する指摘である。

なお、現代用語に編集させて頂いた。

●新時代に対する準備

予備役将校の時代遅れは、取りあえず問題外としても宜しかろう。

しかし、現役の将校までもが、現在のあり様のように、如何に隊務に忙殺されるからといって、余りに読書嫌いでは、問題である。

偕行社の記事も軍事調査会の月報も手に触れないようでは、軍制、戦術、兵器、教育等の軍事研究にしたところで、果たして時代の要求に適應すべく、充分な準備ができているかどうか疑問である。

現行の典範令のみを暗唱して、「戦術はこのようであらねばならぬ」と、あたかも法務官が六法をひも解いて擬律を論ずる（判決において法規を具体的な事件に適用すること）ようなことには長けていても、さて世界大戦で戦闘手段が根本的に革新され、その対応準備のため典範令を自ら編纂しなければならぬ状況になった場合、果たしてこの状況に応じた準備が十分に

なされているであろうか。

日露戦争で自ら経験した実戦の結果は、いち早くドイツにおいて利用され、

それが、逆輸入されて本家本元たる日本の歩兵操典の改正に大いに参考とされたのである。

然るに、今回の世界大戦はこれと異なり、日本は傍観者の立場である。特に聾^{つんばさし}棧敷にあつて真相がよく分かっていない。その上、われら将校の世界大戦に関する研究が不十分である。

（聾棧敷・劇場で、正面2階棧敷の最後方の席。役者の台詞が聞こえにくいことから関係者でありながら情報や事情などを知らされないことをさす）

そうなると、わが日本の典範令の改正は、やはり各国が典範令を改正した後でなければ、新しい分野を開くような根本的な改正はなしえないこととなつて、いつまでも翻訳時代から脱却することはできないであろう。

まさに、遺憶千万と言わねばならぬではないか。